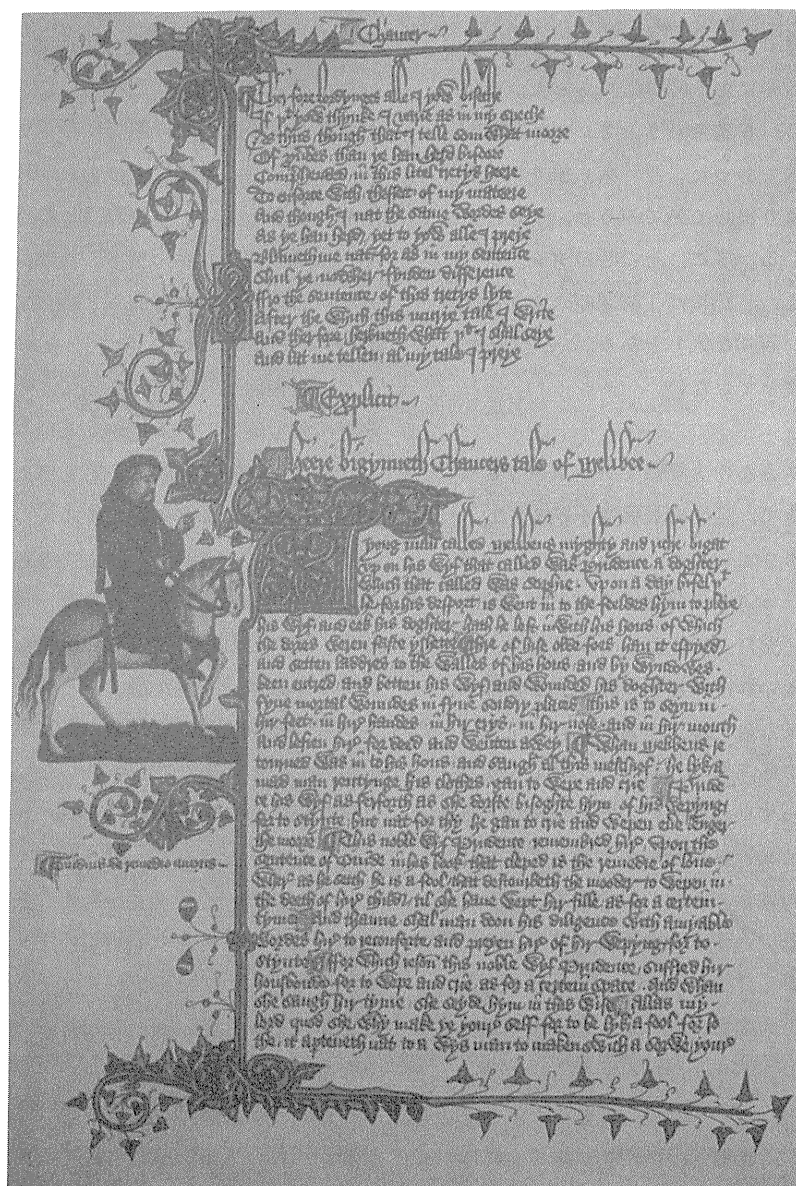




チョーサーの肖像画と『カンタベリ物語』（15世紀初期のエルズミア手写本より）

オットー・フォーゲルさんのこと

手塚 甫

フォーゲルさんにはじめて会ったのは、1978年の暮近くであったろうか、オーストリア文部省の中にある図書館であった。彼はこの図書館の、日本で言うときしづめ閲覧課長にあたる人であった。今、久し振りに当時の日記を引張り出して見てみると、11月8日になっている。序に、その時のフォーゲルさんの印象を、日記には「初老の人だが極めて気のいい、親切な人」とある。この印象は、以後、全く変わっていない。

フォーゲルさんの上背は1メートル70センチ位、細身で、話す時に微笑を絶やさない。目が青昧を帯びていることを忘れれば、日本人と話しているように錯覚するほどだ。彼は、普段、タイズを打っていることが多いが、手が空いてさえいれば閲覧者の請求する何冊もの本を「課長」自ら地下の書庫に行ってもって来る。はじめ、僕は、フォーゲルさんを課長だとは思っていなかった。それ以外のことも、実にまめに体を動かす。他人に頼むより自分で片付けた方が早いせいかも知れないが、部下の若い人がするようなこともどんどんする。しかも、あとでそれを恩に着せる訳でもないし、大変だ、忙しいと愚痴のかけらもこぼさない。いつも生き生きと、当然といった風にやるのである。利用者が、自分のテーマに必要な文献を探しあぐねている時など、そっと側に寄って来て、求めているものを聞くと、年代別、分類別な

どに分けられたカードから巧に選んで、瞬間に探し出す。仮に、それがこの図書館にない場合、どこに行けばあるのかということまで教えてくれる。それだけではない、凡そ教育関係の文献なら、教育史、諸法令、統計等々、オーストリアのみならず、ドイツやスイスを含めたドイツ語圏全体にわたって、求める文献を、どのような手順で探せばいいのか、どの史料、論文がどこに載っていて、どこに行ったら見られるのか、それら一切を、フォーゲルさんは手際よく、懇切に教えてくれる。フォーゲルさんに聞いて分らなければ諦める他ないと思ってい。実際、この点では、大学の指導教授や助手よりも、僕はフォーゲルさんから最も多くを学んだと断言する。教育関係だけではない。ウィーンの何処に、どんな図書館・文書館があつて、それは何の分野に最も適しているのか、というオーストリア史研究の基本に関わることさえ、実際には大学の授業でよりも遙かに多くのものを、僕はフォーゲルさんから教えてもらった。勿論このような恩恵に浴したのは、僕だけではない、ここを利用した人なら誰でもそうだ。彼のやり方は、相手が誰であろうと変らない。

一度、閲覧室に、文部省のある局長が文献を求めてやって来たことがあった。何しろここは文部省の中の図書館だから、当面の立法に関することを調べに、役人がよくやって来る。そんな時、司書はどんなやりかけの仕事があつても、時に先の利用者の注文を措いても、その役人の求めを第一にするのは当然としても、そんな時、身のこなしに、どこか卑屈な感じが出る人が多いのだが、フォーゲルさんはこの時、当面の仕事を片づけるまで少し局長に待ってもらってから、その局長の依頼に応じていた。局長もこれを別に異ともしていなかった。その応接の様子は、貧しい外国

人学生の、要領も弁えず、妙なことばかり聞くのに対する時と全く違いを見出すことは出来なかった。「フォーゲルさんてこういう人なのか」と、一人合点したことを今も鮮やかに思い出す。

因に、フォーゲルさんの趣味は、駄洒落みたいだが、ワンダー・フォーゲル、つまり山歩きだ。暑中休暇などを利用して、これまでに、東西六百キロ以上に長くのびるオーストリアを横断したというのが、彼の自慢の一つだ。そう言えば、フォーゲルさんは歩くのが速い。背筋をのばし、大股に歩く。一度、街で彼の後姿を見つけ、声をかけようとして追ったが、追いつくどころか、逆に離れるばかりなので、小走りに駆け出さねばならなかった。

彼は、1981年春、65才の停年を5年残して勇退した。後進に道を譲るためである。その後、ウィーンの行政文書館の中の一室を拠点に、1848年以後のオーストリアにおける全中学校教員の略歴を調べ、その名簿を作る仕事に専念している。文部省の閲覧課長の時と同じように、今日もあちこちの図書館や文書館に通って、史料を蒐めているのである、しかも、無報酬で。どうしてかと聞く僕に、彼は、自分には十分な年金がある。これは楽しみでしている仕事なのだ、と、例の物静かな微笑を浮かべながら答えてくれた。

彼には三人の息子がいる。一番上は31才、ウィーン12区で牧師をし、夫人は神学博士、8才を頭に四人の子持ちである。二番目は29才、裁判官で、三年前に結婚した夫人も法学博士とか。一番下は26才、親と一緒に暮しているが、ウィーン商科大学の助手をして、目下、学位論文を書いている、と、先日、フォーゲルさんから来た手紙にはあった。フ

ーゲルさん自身も職場結婚で、奥さんも司書。一昨年春、フォーゲルさんを自宅に訪ねた時に、奥さんにはじめて会ったが、やはり穏やかで、でもフォーゲルさんよりは少し太目の、茶菓を持って来てくれながら、飾り気なく気さくに話す、気持ちのいい人であった。図書館の中で知るフォーゲルさんそのまゝのような家庭であった。フォーゲルさんは、いつまでも、どこまでもフォーゲルさんなのだなあ、と、その時つくづく思った。彼には図書館の仕事が本当にびったりしている。縁の下の力持ちの、地味な仕事の本領の図書館の仕事って、フォーゲルさんみたいに出来たら理想なのかと思う。いや、それは図書館だけのことでないのかも知れない。

フォーゲルさん夫妻を、一度、日本に招いて案内するのが、今の僕の夢である。

(社会学)

□ 閲覧証の交付

教養図書館を利用するには閲覧証が必要です。新入生の皆さんには下記の日程で交付します。当日カウンターまで取りに来て下さい。ただし、医学部は医学図書館で4月21日以降交付します。なお、交付までの間は、学生証を使用して下さい。

衛生学部	4月20日(月)
薬学部	4月21日(火)
獣医畜産学部	4月22日(水)
水産学部	4月23日(木)
看護学部	4月24日(金)

“本を読む”とは……………

奥 井 一 満

『文芸春秋』が戦後の名著ベスト10を選ぶと言う企画をたてた。名著と言えば従来、漱石、鷗外、あるいは福沢諭吉、西田幾多郎等々に相場が決っており、大体が明治、大正、昭和初期と、いわゆる歴史的評価の定ったものと見られていた。だが、戦後40年経過し、年々、膨大な出版物が出されている今日、改めて戦後を考えて見よう、と言った企画のようである。そこで各分野の方々にアンケート方式で“私の10冊”を気ままに選んでもらい、何等かの傾向があればと、その依頼が私のところにも来た。

趣旨の通り、私も至って気ままに自分の書架の中から、印象に残っている何冊かを選んだが、最後の一・二冊は相当に迷った上での選択だった。その結果は本年一月号の380ページから403ページにまとめられているが、126名の回答から出た結果を井上ひさし氏と山崎正和氏が対談でまとめている。最高点が16票の『黒い雨』（井伏鱒二）だそうで、上位が62冊にわたると言うから、大変に分散した結果であるといきようはないが、上位3位までが、大岡昇平『野火』埴谷雄高『死霊』と小説が占めた。又、作品は別でも三島由紀夫、司馬遼太郎等も上位に入っている。こうした結果と私自身の選択との比較を論じても仕方はないが、7割は作品はとに角、作家の一致は見ているので、大体、同じような選択と言って良いのではなからうか。

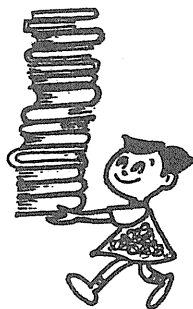
ここで、共通して言える事は、いわゆるベストセラーが、一つも選ばれていない事と、やはり、評価の定ったと見られる作品、つま

り、昨年、一昨年のもより昭和20年代、30年代の作品が、非常に多いと言う事である。これは、ある意味で大変、興味深い事だ。その一点は、私自身がそうだった所為もあるが、若い時に読んで、ある種の衝動を受けた（回答者の多くが年輩者と考えられる）作品を推し、それがとりも直さず、その本の評価になったと考えられる点である。また、第二は何十万部、何百万部のベストセラーも一過性であれば印象は薄れると言う点である。このようなベストセラーが出版する側の意図や時代に沿ってと言った、おもねりである場合、尚更である。

だが、私は考えてしまった。一体、名著とは何なんだろうかと。その答は未だ出ない。文春のアンケートによる選択は、確かに一つの方法ではある。だからと言って、上位イコール名著と判断するのも早計である。むしろ作爲的名著づくりと言えないこともない。戦争体験の作品が多いのも戦後出版物の特徴で今回の上位62冊の中にも相当入っている。となると、戦時体験者と、そうでない者（正に人口の大部分が戦後生れ）との間で、受ける印象は大部違う筈である。太平洋戦争を体験する世代と、これを歴史と見る世代の差は大きいだろう。それが重複したままで名著選択にかかわったとすると、何割かの恣意を割り引いて考えねばなるまい。さらに、また何十年か経過し、同じような企画があるとしたら、その時の選択者は、若い頃の印象に従って赤川次郎を挙げるのかも知れない。私自身、漱

(行動学)

その場で予約することができます。



手垢のついた本

石 多 正 男

いまどき図書館の中の本を手にとって、それに付いたほこりを払いながら「この本をいままで何人の人が手にし、読んだだろう」などと感傷にふける人は少ないだろう。でも、わたしはこんな風にちょっと古くさく考えることが好きだ。本に人の手垢（てあか）がついているほうが、なぜかその本がとっても大切なものであるような気がする。ほかの人が読んだのならばくも読まなくては、と思うのもいいのではないか。

いま、世の中には本があふれている。本と言うより、雑誌や新聞をも含めた印刷物と言ったほうがいいのかもしい。写真週刊誌に代表されるように視覚的にも速く読めることが重要とされ、私達も電車に乗っている時間をもったいないように活字を追っている。情報が氾濫する中、とにかく速くいろんな知識を仕入れ、どんどん消化していかないと社会に遅れてしまうと思っている。だから、本もすぐに消化されてしまう。簡単に買われ、無意識のうちに捨てられてしまっている。本に手垢などつくひまはない。取っておくに値する本が少なくなっていること、新品でなくちゃいやだという現代思潮などがその原因なのかもしれない。写真など一度見たら、それで終わりというのが多いのではなかろうか。

考えてみると、これはなんとももったいないことだとわたしなどは思ってしまう。わたしは最近「自分の本」は出来るかぎり買わないようにしている。まず第一の理由は、買っても家に置くところがない。狭い家に住んで

いるので、ただでさえ狭くて息苦しいのに本を置いていくと、ますます窮屈になる。第二に、いままでの経験から思うに、私の場合、ほとんどの本は一度は読むものの、そのあと本棚に置いてしまうと読み返すことはまずない。繰り返し使うのは辞書ぐらいである。第三に、本の値段もばかにならない。社会人のはしくれになってみると、2,000円だって、3,000円だって自分で働いて得たお金かと思うとありがたい。本を買おうかなと思った時、買っても置くところがない、一度きりしか読まない、3,000円あれば演劇かコンサートに行ける、等々と考えてしまう。いままで、こうして買わなかった本がどれほどあるだろう。

だから、このごろは本はまず第一に図書館から借りるようにしている。大学人の特権かもしれないが、大学図書館が自由に使える。その上、近年、国、県、市町村が地域文化の発展などと言って、市民レベルの図書館を多く建ててくれている。私の住むこの相模原市にも市立図書館が各地域にあり、市民は家の近くの図書館へ気がるに足を運び簡単に本を借りれるようになっている。わたし自身は大学図書館にはないような本、例えば、家の補修（わが家のため）、冠婚葬祭入門、古典落語などの本を何度か借りたことがある。相模原市内にあるかどうか知らないが、以前住んでいた東京のある区にはレコードや音楽テープを聞け、また貸し出しをしてくれるところがあり、これには大いに喜び、よく使わせてもらった。

さてここで、ちょっとどこかの偉い学者のように書くが、本というのは一人で読もうと、二人で読もうと一冊で済む。百人が一冊の本を読もうとすると、もちろんいろんな不都合が出てくる。でも、一週間待って、手にはいるのなら待つてもいいのじゃないかと思う。

本のほうだっている人々に読まれたほうが、うれしいのじゃなからうか。なかにはこの本はおれだけが読みたい、ほかの奴には使わせたくない、と思う本もあるかもしれない。でも、こんな本はひとりの人間一生のあいだに二、三冊ではなからうか。

こんなふうを書く私も以前は家の自分の部屋を本の山にして、それを眺め、自分はよくもまあこれだけ勉強したものだ、と悦に入り、自己満足に浸っていた。ところが、よくよく考えてみると、こうして本が本棚に並んでいるかぎりには、この本は使われていない。飾りとして置かれる本も多くあるのだろうが、やはり本は読まれなくては死んでも同然だ。本はけっして私物化してはならない。大げさに言えば、本は人々の共通の財産だ。

偉い学者先生の中には、本は図書館に置いておいても意味がない、借り出されてこそ価値がでると、返却期限もかえりみず一年も二年も借りていらっしゃる方がいると聞く。図書館職員の方に同情したい。ところが、こんどは図書館職員の方からお叱りを受けると思

うが、職員の方のなかには本をちゃんと管理することがなによりも第一だと考えていらっしゃる方が多いような気がする。（ことわっておくが、これはけっして北里大学教養図書館のことを念頭に置いて言っているのではない。）本が借り出されるのはうれしい、しかし、返却は一日たりとも遅れてはならない、と。それがお勤めでいらっしゃるから当然だろうが、本を借りていることを忘れていたために、あるいは単にずぼらなために返却が遅れることもよくあるだろう。しかし、読んでいて返却期限に遅れることもある。

エッセイを書くはずが、なんだか勝手言いたい放題の雑文になってしまった。とにかく、私は本はできるだけ多くの人を読み、使うことが本来のあるべき姿ではないか、汚れて手垢がついていたって、新品でなくなっただけいいのではないか、と思っているのである。

（独語）

「講義用参考文献」と 「ゼミ指定図書」

図書館では、講義の理解に役立つ参考書をはじめ、先生方が講義の際に触れられる可能性のある図書を購入して利用の便宜を計っております。書架はカウンターの左側。利用方法・貸出期間等は一般図書と同様です。大いに利用して下さい。

雑 誌

一階の雑誌コーナーの書架表側には新着雑誌が、扉を開けると中に、その年のバック・ナンバーが入っています。1年分がまとまると製本され、二階の書架に排架されます。ただし、1980年以前の雑誌や、雑誌コーナーにない雑誌についてはカウンターでおたずね下さい。

□ 表紙解説

チョーサー作『カンタベリ物語』とエルズミア
手写本について

瀬谷 幸男

この作品はチョーサー（c1340-1400）の代表作で主に韻律は弱強5音歩格の対句を用いた約一万七千行の韻文と若干の散文から成る。詩人は晩年の10年余を費やし執筆にあたったが遂に完成を見なかった。

立ち返る春の季節、花はころび小鳥囀り始める頃になると英国各地から善男善女が殉教者、聖トマス・ア・ベケットの廟に霊験を求めカンタベリ巡礼に赴く。チョーサー自身も信心気を起こしお詣りを思いたち、ロンドン郊外のサザーク地区にある旅籠、陣羽織亭で巡礼の第一夜の旅装をとく。彼はそこで同じ目的を持つ29人もの同宿者に会おう。彼等の服装やいでたちからして騎士、聖職者、商人、学僧や種々の職人等当時のあらゆる階級に属する一行のようである。宿屋の亭主も自ら同行を申し出、一計を案じて旅のつれづれを慰めるためにも道中の行き還りに各人が1つずつ馴染の昔噺の語り競べでもしてはどうかと提案すると即座に皆の賛同を得ると云う構想の下にこの物語は始まる。しかし、チョーサー自身の死によって計24の物語で目的地に着くこともなく終る。

未完の作品とは云え、これらの物語群の中にはロマンス、笑話、聖女伝、殉教話、動物寓話、民間伝承や説話等々、中世に広く流布していた文学ジャンルが披露され、後世ジョン・ドライデンをして、“ここには神の豊饒

がある。”と絶讃せしむるに値いするものがある。各物語の背後には人生に対する詩人の深い経験と円熟した心境が読みとれる。この稀有の作品によってチョーサーは正に“英詩の父”にふさわしく英文学史上初めて中世の束縛から脱し、近代的特質を示し得た詩人と云えよう。詩人はこの作品の中で中世とルネサンス両時期の特質を旨く調和させ、彼の文学の神髄である人間性に対する温かい余裕の心、鋭敏な観察力、就中そのユーモアの感覚を遺憾なく発揮している。

エルズミア手写本はこの作品の書かれた最良の手写本の1つで、各物語に登場する人物等を彩色豊かな実に美しい挿画で飾った豪華な金泥写本である。英国の初代エルズミア伯爵の名に因むこの手写本の原本は現在アメリカ、カリフォルニア州、サン・マリノのハンティントン図書館に所蔵されている。

表紙に掲載したのはそのファクシミリ版でチョーサー自身が語る『メリベウス話』の最初の部分にあたる。（英語）

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

□ 編集後記

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

教養図書館ではこの『閲覧ニュース』を年、数回発行しています。蔵書紹介や新着図書案内、エッセイやその時々のお知らせなど、利用の手びきとして、『図書館利用案内』とあわせて御覧下さい。

今回は、手塚・奥井・石多各先生方にエッセイを、瀬谷先生に表紙解説をお願いしました。

閲覧ニュース 51号

1987.4 発行

北里大学教養図書館

発行責任者 手塚 甫

〒228 相模原市北里1-15-1

電話(0427)78-8005